

中学一年生の頃（昭和三十一年ごろ）

学校へ行くのは、今と同じように町内毎にまとまって通学していました。

町内毎でも今は中学だと一人か二人とバラバラですが、当時は子供の数も多かったので、中学の三学年でも、町で十人は超えていたように思います。中学になると色気づいたのか男女別々に通学していました。

私が一年の時は、三年生には源九の大ちゃんがついて、蛭子町の大将でした。そして二年生にマー坊さん（マーボさんと呼んでいました。）、富士ちゃん、あかしのマーヤン、カンマさん、がいて、一年生の同級生は、浜のヨシジ、かばのタカオ、前のマーヤンと男の同級生が四人いたのです。女は、ごよむの久美ちゃんと浜の塩竹のサワちゃんの二人だけでした。

いつも横町（よこまち、横道とも言います。）を通過して豊栄橋を渡り、右は網勘製網、左は長く続く飯田病院の塀で数メートルごとに十文字のデザインの透かしがありました。広い敷地に沢山の大きな木が植えられていて、肺病の病棟があつて、近寄ると病気がうつると恐れられていました。病院の正門は、車寄せのある、とても立派なつくりでした。

そして運河を渡ると右は、富田浜病院の塀が続き、



塀が途切れたら右に曲り、八百セを過ぎると国鉄関西本線富田浜駅の北の踏切を渡って、すぐに左に線路沿いに細い道を行くと中学校でした。

登校時はいつもこの道を通いました。下校時は、もうバラバラに帰ります。帰り道も八百セを左（北）へ折れ、一本松を通過して一号線を通ったり、一本松から右（東）に折れ豊栄橋から横町を通過して帰ったりしました。

その頃私は、毎日このメンバーで学校から帰ると日が暮れるまで遊んで過ごしていました。そして私は気も弱くて、長男で、兄貴がいけないこともあり、よくこの連中にいじめられたりしたのです。

登校途中、マー坊さんが、「あのめめず（ミミズのこ）の太っとい、大っきいの、なんて言うンやった？」

と聞かれて、うっかり「大根めめず？」と言った途端、大ちゃんから「ごっん」と殴られました。大ちゃんは、「大根」というあだ名だったのです。しかしいじめられたと言っても、この程度のかわいいものでした。

また、この通学路の飯田さん（飯田病院のこと）と富田浜病院の間の運河の水門の隙間に、足が不自由な身体障害者のおじいさんが住みついていて、自転車とリヤカーを合体させたような車で、手で漕いで動く車を使って、「いかげや」（鍋の修理のような仕事）をやっています。このおじいさんを、からかったりして、追っかけられたりしたこともありました。子供と言うのは残酷なことも平気でやるのです。

一年生の時は、少し色気づいてきて、学校ではG組（一クラス大体五十五人くらい）でした。担任の先生は、早川恭平さんと言う数学の先生でした。この先生は、ヤマアラシと呼ばれていて、簡単な問題が分らないと、すぐゴツンとやられて、怖い先生でしたが、さっぱりしていて、男気もあり、みんなは「恭平さん、きょうへいさん」と呼んで、慕っていました。

他の先生は、テレビ塔と言うあだ名の石橋先生、お

ばあちゃんというあだ名の中川先生、キンカンと呼ばれていた英語の西井先生、年配の宮田先生、神経質そうな数学のアンペアさん、そういえば、大学を出てまだ先生になりましたの、子供心に美人で評判だった中本先生もいました。社会科の小林先生は赤ら顔で、あかざると呼ばれていました。理科の大橋先生。大橋先生は、柔道部の部長もやっていて、一年半くらい私も柔道部に入っていたのでお世話になりました。そうそう、体育の先生で言うことを聞かないとすぐ殴る、バスケットの部長だった、川本先生（後笠井先生と名前が変わったが、みんなは、「かーもつつあん」と呼んでいました。）バスケットは、よく地区優勝していて、人気の部活で、この先生は、みんなからもとても慕われていました。どうしてこの頃の先生は、それぞれに信念のようなものを持っていて、こんなに個性的で、多士済々だったのでしょうか。

クラスメートに、「あたた」というあだ名の、転向してきた男がいて、名古屋弁のような話し方で、歯切れが良く、ちよっとすれていて、色々助平な話をしてくれて、すぐ仲良しになりました。この男は、とても調子が良くて、話も上手で、何をやらしても如才が無く、

人気者でした。

クラブ活動

中学生になると、全員なんかのクラブ活動に入らなければならぬと言うことで、どういうわけか、柔道部に入り（一年半ほどでやめてしまつて後は読書部という何も活動しないクラブでした。）クラブ活動という新しい経験をしました。

柔道部では、一年先輩の尚美（てるみ）さんや、平吉さんには良く稽古をつけてもらいました。同級生では、いっちゃん（村田）やぐんじ（植村）などがいました。いろんな人と練習をしました。（乱取といっていました。）投げられたり、押さえ込まれて寝技になると、柔道着のあの汗の臭いが顔に覆いかぶさってきて、あれけっこう汗臭いのです。今となつては、とても懐かしい臭いですが、当時は、結構苦痛でした。

何度か隣の橋北中学に遠征（練習試合）に行きましたが、その時、横にいた尚美さんが、試合が終わつた後、柔道着を脱いで汗を拭いていたのです。そしてその下に先に外したメガネを置いていたのです。それを知らずにうっかり、踏んでめがねを壊してしまい、尚美さんは、「ええわ、ええわ」と言つて、めがね無しで

帰りました。とても悪いことをしました。

そろばん

富田の子供たちの殆どが、小学校3年生くらいで、掛け算の九九をおぼえた頃には、そろばんを習いに行っていました。もうそろばんを習いに行かないと、友達つきあいが出来ないような空気すらありました。

当時は、城町の北側の真ん中くらいにある、普通の家で、机を沢山並べて、黒田隆次先生が自宅を使ってそろばん塾（この地区では、みんな、「そろばんや」と呼んでいました。）を開いていました。競技部、一部、二部、三部、四部まであったでしょうか？全国的な珠算の資格で、全珠連という組織が、資格の等級を決めていて、初心者から順に一級までと更に上級の、初段、二段、三段とあり、段の付くのは、何千万とか何十億の桁の暗算などが出来ました。もう富田の子供たちは、二級・三級は当たり前、殆どが一級を持っていました。段を持つている者も数十人いたのです。私は、二級がどうしても受かりませんでした。今でも悔しく思っています。友達は、殆ど一級を持つているの

ですから・・・。そしてもうこの頃から、全国大会で、小学校の部で何度も優勝を重ねていて、この富田は、そろばん王国といった雰囲気でした。

だから、この黒田先生の評判はもう文句なしで、みんな、「たかじさん」と先生の事を陰で呼んで尊敬し、親しんでいました。・・・がしかし、この隆次先生に、殴られなかった子供は少ないのではないのでしょうか？ 殴り方も半端ではありませんでした。長い箒を逆さに持つて、その長い竹の柄の部分で、「ピシャッ！」と大きな音がするほど、尻を殴られたのは一度や二度ではありませんでした。

しかし、悪いことをしたときです。あの頃は、みんなチョココチョコと話しをしたり、ふざけあつたりしていたのです。そろばんで間違えたり、出来なかつたりしたときなどは、「あほっ！」と怒鳴り、竹の根っこで出来た二尺ほどのムチの棒で、軽く手や頭を叩かれるくらいでした。ちゃんと使い分けていたのですね。

それから、そろばんの授業をせずに、話をしてくれる時がたまにありました。もう話の内容は完全に忘れてしまいました。が、「ギータンガラガラ、ギータンガラガラ何とかかんとか・・・」言う長い名前の男の話や、

「大クラス・小クラス」の兄弟の話などがありました。みんな目を輝かせて話に聞き入っていたのを覚えていません。

さて、この城町が狭くなってきたので、引越します。新々町の塩役橋の手前の総2階建てです。この二階で、机を並べて、ここでも習いました。隆次先生の師範代の「いーちゃん」（井村さん）という細身のメガネをかけた人にも教えてもらいました。この頃から「富田珠算学園」と名乗ったように思います。（今は、新々町の浜のほうに移っていて、分校をいくつか、西の方々に作っています。）

日曜学校

そろばんの話が出たら、日曜学校のこと思い出します。

やはり小学校の上級生くらいになると、みんな子供たちは、願入寺（がんによつさんと呼んでいます。）へお経を習いに行きました。「こえんさん」（こころは、ご住職のことをこのように呼びます。）が、日曜の朝、六時ごろだったと思うのですが、沢山の子供たちが、本堂に集まり、「こえんさん」の後について、「正信偈」

を勤めるのです。お勤めが終わると、「ごえんさん」はみんなにひとつずつ、飴をくれるのです。この飴に釣られて、みんな行きました。特に寒の内は、冬休みでもあり、連日寒い中を通ったのでした。お陰で、富田の人は、殆どお経が出来ます。

この「ごえんさん」は、馬嶋恩知という名前での浜地区では、「ごえんさん」とか「おんちさん」と呼んで親しまれていました。なんでも戦争中は、「大尉」だったそうで、とても偉い人だったのです。あのそろばんの黒田隆次先生ですら、まるで子供を呼ぶように、「おい、黒や」とか「くろ」とか呼んで、あのこわい黒田先生が、「はいっ」と返事をしていたのを覚えています。

あそび

学校に行く前、帰ってきてから、なんと言うことな路上に集まってきて、数人集まると遊びが始まりました。一番良くやったのが、「しょうや」でした。直径六く七センチのボール紙で出来た、標準語で言うところ「めんこ」です。

当時、ゴミトリは、殆ど木で出来ていて、これをさ

かさまにして、台にしました。何枚かずつ出し合って、台の中央に重ねて置き、それを持つている別の「しょうや」を台に「ばちん」と叩きつけて、風を起こして、重ねておいてある「しょうや」を吹き飛ばしてひっくり返すと、その「しょうや」は貫えるのです。そのときに叩きつける「しょうや」は、それぞれ良く風が起るように工夫をしました。油をしみこませて、くたくたにして、台に叩きつけた時ピシャッと吸い付くようになり、よく風が起るのです。新しい「しょうや」は、叩きつけた時、はねて、うまく風が起きないので、だから、「しょうや」は、古い感じの物が特に珍重されました。新しいものでも、いわゆる茶色のボール紙の「しょうや」は、値打ちが無かったです。白いボール紙で、表にきれいなカラーの当時のキヤラクターの描かれているもので、蠟引きのものは、非常に値打ちがありました。また、線画で描かれた、歌舞伎のミエを切っている絵柄のものなどは、昔のと言う意味の「むか」と呼んで、これは貴重品でした。

この「しょうや」の裏に、0く9までの数字のはんこを三枚か四枚づつ押して、それを使って「かぶ」（いわゆるおいちよかぶ）をよくやりました。誰か沢山「し

ようや」を持つているものが、「親」(胴元)になり、「子」の数により、四く五枚の「しようや」を裏の数字を見せて並べます。そしてどれか自分の好きな所に、「しようや」を張ります(賭けること)。張る枚数は、大体数十枚、積み上げて一センチから三センチくらいでした。子の分を配ったら、最後に親の分を三枚取ります。その三枚の内から自分の好きな数字を一枚選んで、足の下に隠します。

そして最初の所に張った人に、親は、表向けて(数字を隠して)子に一枚配ります。張った所の数字と配られた数字を足して、下一桁が、九に近いほど強いのです。八とか九なら、「もうエエ」と言ってお伏せておきます。次の数字に張った人にも同じように数字を隠して一枚配ります。五までの数字だと、殆どの人は、「もういっちょう」と言い、親からも一枚貰い、その追加した「しようや」は、数字が見えるようにおきます。こうやって、「子」に対して全部配り終わったら、最後に自分の分を一枚取ります。勿論「子」には見せません。それと最初に足の下に隠したものと合わせて、これなら「子」に勝てるかどうか判断して、「子」に対して勝負します。

数字の組み合わせにより、シロクマ(四、六、九)のカブ!とか二、三、四のノボリカブ!とか三、三、三のアラシと言つて、「しようや」をパチッと叩きつけて、勝ち誇つて勝負したのです。シッピン(四と一)とクッピン(九と一)は確か普通のカブより強く、アラシが一番強かつたように記憶しています。六、六、八とか五、六、九などゼロになると最低で、ブタと呼んでいました。

とにかくこの「しようや」では、本当に良く遊びました。

また、玉(たま、いわゆるビー玉)も良くやりました。当時は、舗装してある道などありませんでしたから、地べたに大きさを言う十センチ×十五センチほどの長方形を書いて、そこに何個かずつ玉を出し合せて置きます。そして大体四く五メートル位離れたところに線を引き、その線から出ないようにして、じゃんけんなどで順番を決めて、手持ちの自分の玉で、前の枠の中の玉を狙い、狙いすまして投げます。どこかにあたると、いくつかの玉が長方形の枠からはじき出て、はみ出た分はもらえるのです。

それから、「けんまけいば」と呼ぶ遊びも良くやりました。

いいやん（じゃんけん）で負けた人が、馬になりま
す。まっすぐ伸ばした両足首をつかみ、首は内側にで
きるだけ入れて、馬になります。その馬を跳び箱のよ
うに飛ぶのです。ただ飛ぶだけでは遊びになりません
から、例えば一番最初に飛ぶ人が、「ムサシ」とか言っ
て飛び、着地した所から、むさしを六、三、四と読み、
前へ六歩、後へ三歩、更に前に四歩進んで、その位置
で回れ右して、そこから馬を飛んで戻ります。後ろに
下がる時に、馬にぶつかったり、最後に飛ぶ時に離れ
すぎてうまく飛べなかつたりすると、馬役を交代する
のです。他には、「東郷さん」（十、五、三）とか色々
ありましたが、もう忘れてしまいました。誠に単純な
遊びでしたが、結構やりました。

また、名前は忘れましたが、馬役が沢山連なってい
るのがありました。

一人が塀を背中にして立ち、次の人が、その立って
いる人の股の間に頭を入れて、その人の両太ももを抱

えるようにします。次の人は、その人の尻の下に頭を
突っ込み、やはりその人の太ももを抱えます。こうし
て次々と数人が連なります。いつも四〜五人が馬にな
っていました。そして、その連なった馬役に、やはり
跳び箱のように飛び乗ります。何人がこうやって飛
び乗り、馬がつぶれたりすると、もう一度やり直しま
す。全員乗ったところで、馬は、暴れるのです。何と
か振り落とそうとするのです。落ちると、一番後ろの
馬になり、こうして順次入れ替わっていくのです。当
時は、ぼつてり太っている人は少なく、尾てい骨が出
ていて、どすんと飛び乗られると、本当に背中が痛か
ったのを覚えています。一見公平な遊びのようですが、
やはりいじめられ易い子の所に集中的に乗られたよう
に思います。

それから、「ごま」（こまですが、ごまと呼んではいま
した。）は、一人でもでき、たまに遊びました。全国的
によく紹介されているような、ごまを回して、ぶつけ
合う遊びは、この辺りではしませんでした。

回すことは回すのですが、直径二〜三センチ程のポ
マードの蓋のようなものが良く使われました。ごまを

放り投げるようにして、ぐいと引き、戻ってきたごまをその蓋に載せるのです。

最初は、やかんのふたなど大きなもので練習して、徐々に小さなものにしていくのです。近所のマーボさんなどは、目薬の蓋（直径一センチもない！）に載せる事ができました。

それから、このごまを使って、「ひーよ」と呼ぶ曲芸のようなごまの遊びもしました。

長めの紐を使って、ごまを回しながら、紐に沿って落とし、膝くらいに落ちたら、又引き上げてごまを宙に浮かし、その宙に浮いたごまに又紐をかけて・・・と繰り返します。これを「小振り」と言い、慌ただしく手を動かして、ごまを回し続けるのです。

この動作を外に向かって、もっと大きくしたのが、「大振り」と言い、紐いっぱいの外にごまを放り出して、グイツと引き、ごまが宙に浮いて戻ってくる所に、又紐をかけて外に放り出すように繰り返すのです。この大振りには、なかなか優雅で、見栄えがして、何とか出来るように良く稽古しました。

竹馬もありました。みんな隣のかごやの廣さんに頼

んで、太からず細からずの適当な竹を二本、同じ長さに切りそろえてもらって、二センチほどの厚みで、三十センチくらいの長さのものを二本、竹の節と節の間に竹を挟むように添えて、木の下から五〜七センチくらいの所で、ふと目のしつかりした紐で縛り付けます。縛りつけたら、木の上部を両手でグイツと横に倒して、竹とV字型になった状態で、二本の木の上部を紐でくくりつけるのです。その木をすぐ下の竹の節まで両手で力一杯引き下げて、竹馬を作るのです。同じものをもう一本作って竹馬の出来上がりです。よく絵本で、紹介されているような、一段目に取り付けているのは、全くの初心者で、一段や二段は恥ずかしくて大きな顔はできませんでした。竹も、物干し竿のように長いものを使い、竹の節の四段とか五段の高い所で乗って遊んでいるものが結構いたのです。これくらい高いと、塀の上からや、低い屋根の上からひよいと竹馬に乗って、ゆっさゆっさと歩くのです。そして、左右の竹を左手で、東ねて持ち、空いた右手で、敬礼などして芸をしたものです。一段や二段にして、片方の竹馬を肩に担いで、ケンケンする者もいました。

このほかでは、ドッジボールも良くやりました。それから浜で、十メートルかける二十メートルくらいの長方形の線を引き、その中で素手で、アメフトのようによぶつかり合って戦う遊びがあったのですが、どうやって遊んだのかも覚えていません。

考えてみると、みんな外で遊ぶものばかりです。家の中でどんな遊びをしたのか殆ど覚えていません。間違いなく勉強なんかはしておりませんでしたね。

それにしても、この頃の家庭はどこも、本当に貧しい生活でした。どの家も、造りは、田の字型で、奥の二間は、一家全員の寝室であり、そのうち一間は、仏間を兼ねていました。手前の二間の内、入口から遠い間（ま）は、食事をする所、手前の方は、客間兼遊び間になっていて、裏に出る手前に、台所に当たる、おくどさん（かまど）と井戸、流しがありました。殆どの家は、二十数坪から三十数坪だったように記憶しています。みんなこのような狭い家で、六人、七人というおおぜいの家族が肩を寄せ合って、生活していました。

私は、家が八百屋をやっている、売れ残りの食べ物

が沢山あって、食いものには、さほど不自由をしたと言いたいもなく育ち、これと言って大した根性も無く、信念も無く、平和で、悠久の時間の中で過ごしていました。

一色との戦争

ずっと浜は、何も無く、町（チョウ）からそのままずうっと海になっていました。夏になると、小さかったときは、すっぱだかになって海へ泳ぎに行ったのです。その頃は、浜一面に富田名物、特産品のじゃこ（煮干）が干されていて、生乾きのじゃこを手でひとつかみ、つかんで、むしゃむしゃと食べながら、手のひらがふやけて、筋がいつぱい入るまで泳いでいたのです。このような平和な風景が、物心付いてからずうっと続いていたのですが、浜には堤防も何も遮るものは無く、台風などが来ると、何度も被害を出していたのです。

これではいけないと、堤防を作ることになったのです。堤防と言っても、高さ一メートルくらいのもので、今から思えばちやちなものでしたが、海との間に万里

の長城みたいに波を遮るものが作られました。そして、この工事に、土砂や、用具を運ぶためのトロツコが設置されていて、このトロツコをめぐる、奪い合いの戦いがあつたのです。

工事現場ですから、格好の石があちこちにあり、飛び道具に事欠きませんでした。ある日、それまで何度か小競り合いが続いていたのが、誰が誘うと言うでもなくあちこちから子供たちが動員されて、集まってきた、どんなきつかけで戦いになったのか分かりませんが、石のぶつけ合いの戦争が始まったのです。勿論私も、年上の人たちの陰に隠れるようにして、石を投げていました。蛭子町では、納屋のげーさん、いつもは、青年で、随分年上で、とにかく怖い人でした。「こらっ！ワイら何しとんのヤ！」と言われると、震え上がったものです。このげーさんが、ゴミ箱の蓋を、西洋の戦争映画の楯のように左手で持ち、怖い形相で、大きめの石を繰り返し投げていました。私は、こんな中、そんなには大きくない石が、耳の辺りにあたり、戦意喪失して、逃げ帰りました。

結局、みんなの奮戦むなしく、一色のガイツ（やつらと言う意味で、憎しみを込めてそう呼んだ。）に負け

て、みな逃げ帰ったのです。この一色のガイツは、20人くらい、徒党を組んで、我々の町を睨みまわして凱旋していきました。大将格には、若いのですが、左の額の上の頭に、三日月状のキズがあり、目つきの鋭い、いかにも喧嘩の強そうなのがいたのを覚えています。

泳ぐ

子供の頃は、海岸まで真つすぐ約二百メートルでした。殆どフルチンで海へ泳ぎに行っていました。ものごころ付くとみんなは、六尺ふんどしをきりりと締め、泳いでいました。私は、家が漁師ではないので、六尺ふんどしの締



め方が分らず、ふんどしも無かったので、いわゆる猿股と呼ぶパンツで泳いでいたのでした。あの六尺を締めて泳ぎたくてとても羨ましかったことを強く覚えています。海には、町ごとに、石かけと呼ぶ石をばらばらに積んで沖に向かって十五メートルほど突き出たものがありました。今だに何の役割をしていたものか良く分かりません。浜から、この石かけの石を器用にひよひよいと飛ぶように先端の方に行き、そこから飛び込んだりもしました。石には、ふじつぼがいっぱい付着していて、牡蠣も沢山くっついていました。この牡蠣は、町内でも数軒がここから牡蠣を取ってきて、玄関の庭先で、牡蠣ガラをむき、身だけにして、商売していたのを記憶しています。

この牡蠣ですが、家で、缶詰の空き缶に、釘でいっぱい穴を開けて、針金で取っ手を付けてその取っ手に紐を取り付けます。この空き缶に、消し炭を詰めて、火を起こし、紐を持って、ぐるぐると頭の上で回転させると、穴から空気が入り、ふいごのような状態になり、カッカと火が起こってきます。この火の上に、石かけからとってきた牡蠣を乗せます。程よく焼けたところで、ふうふう言いながら多少砂のついた手で食べ

るのです。何と言っても牡蠣は、この食べ方が一番最高です。

夏は、海への行きかえりが、焼けた砂の上を歩くのが暑くて痛くて、飛び跳ねるように通ったのを覚えています。そして、道中の左右には、蒸籠（せいろ）に煮た小魚（じゃこ・煮干）がいっぱい広げて、一面に干してあり、その半乾きのじゃこを屈んで一掴み取り、食べながら泳いでいたのです。

浜伝いに、南の方へ行くと、富田漁港があり、飯田病院の裏手まで、富田港は続いています。港の行き止まりの岸壁まで行くと、漁船の行き来する、「ながれ」という水路があり、漁船が通らない時を見計らって、その水路を泳いで、向こう岸に渡ります。

そこは名古屋方面でも良く知られていた富田浜海水浴場で、海岸は、風光明媚で知られる松並木の富田浜の海岸線がずっと続いています。しかしわれわれ仲間の間では、富田浜海水浴場と、霞ヶ浦海水浴場は、水に入るとすぐ、ぐつと深くなって、もう少し行くと浅くなっている、すり鉢状になっていて、われわれの富田の海岸のようにズーツと真っすぐ深くならないので、怖い海だとよく話していました。

海岸には、名古屋などの各地から泳ぎに来た人たちが、沢山いて、よしずなどで囲った、二〜三十坪ほどもある、組立式の掘っ立て小屋が、あちこち作られていて、着替えや、休憩所などのサービスを提供して、かき氷や、みかん水、ラムネなどを売っていました。同級生の家も、ここで「しぼりや」という屋号で商売していました。このあたりは、松林が続き、もう校歌の通り、青松白砂連なっていたのです。

『富田中学校校歌今は無き一番』

青松白砂連なりて、

眺めまれなる伊勢湾の

勝地を占めし、学び舎の

通う我らは、我らは、幸多し

この歌詞は、富田中学校の校歌の一番でした。今はこの一番は、風光明媚な海岸とともに無くなっていません。

この富田浜海岸から更に南側に一段と美しい海岸があり、「霞ヶ浦海水浴場」と呼ばれていて、ここは、海

に長く沖まで突き出た囲いを作り、入口は西側にあり、龍宮城のような門があり、「霞ヶ浦ページェント」などと大きな看板が出ていました。ここに入るには、入場料があるので。勿論我々は、そんな金は無く、遠くから指を加えて眺めているだけでした。



しかし、時には思いついて、沖まで延びた囲いを沖を回って越えて、この龍宮城内に潜入したものでした。

泳いだ後、たこの形の噴水シャワーがあり、シャワーを被って、建物の中に

は、風呂が作ってあり、風呂の底には、砂がいっぱい落ちていてさらさらしているのですが、潮水を風呂の湯で落とし、さっぱりしてとても贅沢な気持ちになったのを覚えています。帰りは、正門の龍宮城をくぐって帰ってきました。当時は、近鉄の霞ヶ浦駅から直通のバスが行き来していたように思います。この霞ヶ浦

海水浴場は、名古屋方面のちよつとお金持がよく利用して、隣の富田浜海水浴場は、もう少し庶民の感じでした。両方とも当時はとてもよく賑わっていました。

銭湯と縁台

子供の頃の風景には、銭湯と縁台は欠かせません。

この富田・富田一色地区は、漁村でした。町内の殆どが、漁師や魚屋などの漁業で生業を立てていました。いずれにしても、この人たちは、朝の早い仕事で、昼過ぎには、家に帰っていて、富田にはつい最近まで、文化湯や弥生湯、ゲンゾ、リュウカなどがあり、これらの銭湯が、3時に開店するのを待って、いつも一番風呂でした。

一番風呂は、熱く、この人たちは、揃って熱い湯が好きで、風呂を上ると、体中真っ赤になって、着物は左手でかかえて、手ぬぐいは右肩にひよいとかけて、そのまま殆ど裸に近い形相で、家に帰り、家の外の縁台で、涼を取り、通りを歩く人たちの品定めをして長い夕方の時間を過ごしていたのでした。

時折、私たち子供が、一番風呂に入り、この人たちと一緒にになると、とても風呂が熱くてはいる事が出来

ずに、とても困りました。ある日のこと、あまり熱いので、水を出したのです。そうしたら、「あたまのますやん」爺が、ゆでだこのようになった顔を更に赤くして、怖い形相で、「ひなた水になってまうわれイ！」と怒鳴りつけられた事がありました。

この頃の子供たちは、日が暮れて、暗くなるまで外で遊びました。外は、いつまでも子供の声で、喧しかったのです。夕方になると、どこの家にも、連子格子に立ってかけてある縁台を道路に置き、夕涼みをしました。もう通りの両側に縁台が家々ごとに並び、普段見かけない人が通ろうものなら、「おーら、どこの人やるね？」と殆ど聞こえるように、ささやきあい、じろじろと眺められて、とても平然と通ることは出来ませんでした。車などもめつたに通らず、おおらかで平和な日が続いていました。

物売り

三時過ぎ頃だったと思いますが、紙芝居が来ました。われわれの所は、今の天神町のスミちゃんとの前で、紙芝居を見ました。ここに荷台に紙芝居一式を積んだ自転車を置き、チンドン屋のように、首から太鼓をタ

テにぶら下げ、やはり首から下げた笛を口にくわえて、前後二く三町の横まちを太鼓を「どんがじつち、どんがじつち、どんがどんがどんがじつち・・」と叩いて、「ピッピラー」と笛を吹き、行き来して、紙芝居が来たことを子供たちに知らせます。そうすると、どこからとも無く、子供が十人から十五人くらいいめいめい五円玉をにぎりしめて集まってきました。当時風呂代も大人十円、子供五円でした。金を払うと、水あめを、十センチくらいの木二本で取ってくれます。時々ウエハースをつけてくれたりします。この飴を、二本の木で、こねるのです。こねて、こねて、こねるのです。そうすると空気が混じり、だんだんと白くなってきます。必死になってこねるといふ仕事を加えることにより、飴は、よりうまくなるのです。ウエハースが付いている場合は、更にこのウエハースのかけらが混じり、とても美味しく感じたものでした。

紙芝居は、当時熱心に続き物で見えたのは、「天誅蜘蛛」(てんちゅうぐも)というのがありました。妖術使いの善玉役で、「こんちきこりの守」といふ狐の顔の妖術使いの悪玉を、退治するという物語でした。

この天誅蜘蛛は、どんざのような着物を着て、手首

まで、黒い網目の肌着のようなものを着ていました。そうです、地雷也のような格好です。あれが格好よくて、黒い網目の肌着が欲しくてたまらなかったのを記憶しています。

この紙芝居のおじさんは、この天誅蜘蛛の物語の中のせりふで、ここで笑いを取ろうという時には、よく「左様でござる。ござるのけっつは、マッ赤つかでござる。」といいました。子供たちは、みんなどっと笑い、紙芝居のおじさんは、得意満面で紙芝居を続けたのでした。

飴細工売りも来ました。

自転車に作業道具一式をくくりつけて、適当な所に自転車を停め、広げます。そして、真鍮のような色の燭台のような形をした笛で、吸い口には、麦わらを切ったようなものをはめて、そこから吹くのです。割と甲高い音色で、ちようど風船に笛の付いているのがありますが、風船を膨らませて、離すと「ふわー」っと出る音にちよつと似ていました。良く遠くまで聞こえました。「チャララー、ちゃらー、らららら・・」メロディーはもうどうしても思い出せません。この笛

を吹いて、飴細工屋が来たぞーっと子供たちに知らせます。細工道具には、ふいごのようなものがあり、それを手で押したり引いたりして風を送り、火を起こして、白い飴を柔らかくして、細工をします。サルや、犬や、いろいろな動物の形にそれは見事に細工をします。細工道具は、小さな和バサミだけで、形を作り、前に並べてあるいろいろな色の筆で、色を付けます。目の色、顔の色、などそれは躍動感あふれるものでした。

鐘を鳴らして、自転車で、アイスキャンデーを売りに来るのもありました。「カラン！カラン！」と鐘を鳴らしてくるのです。

それから、アサリやシジミ売りのおじさん。「あーさりやー、しーじみ・はまぐりやー！」とつぶれた声で、各町内を、自転車でまわるのです。家から、母親たちが、ざるを持って飛び出てきて、声をかけます。アサリや蜆の入ったしつかりした、魚を入れる箱を3段に積んでいて、一升ますに山盛りアサリや蜆を入れてくれるのです。

それからめったに来なかつたのですが、固焼きのせんべいを売りにくるおばさんもいました。「北風が吹く

と香ばしいて美味しいよ・・」と声をかけていました。北風が・・といえ、冬になると、縁台を通りに直角に立てて、風除けにして、お年寄りが、地べたにむしるとかゴザのようなものを敷いた上に座布団を置き、良く日向ぼっこをして、孫を遊ばせていました。

駄菓子屋

普段は、子供たちは、蛭子町のたばこ屋や天神町の治郎八や中川町の駄菓子屋に五円とか十円玉を持っていきましました。小学校の頃は、まだ五十銭玉が通用していました。新町の材常の前の「加納」（いっばち）もありました。楽しい駄菓子がいっぱいあって、限られた少ないお金で何を買おうかと、長い時間をかけて悩むのです。こがし（粉菓子）やみかん水は、特に人気がありました。

これらの駄菓子屋では、夏は、かき氷とところてんが超人気のメニューでした。かき氷は、透明なシロップをかける、「せんじ」が大人っぽくて人気でした。赤いイチゴシロップとか黄色のメロンシロップは、あれは子供が食べるもので、われわれは食べませんでした。また、ところてんは、先に針金の格子の付いた、細長

い木の容器に羊羹のようなところてんを入れて、水鉄砲のように押し出すと、先から細いうどんのような状態のところてんが出てきます。それを小皿にあげて、酢醬油をかけ、煎りごまを振りかけて、箸は、一本だけで食べました。

それ以外の季節は、お好み焼き（やきそばも）やおでんを売っていました。おでんといえは、当時はこんにやく一本槍でした。今のように、たくさん種類はありませんでした。煮ているおでんの中に、直径十センチほどの円筒形の容器に味噌だれが入っていて、長い竹串に三角形に切ったこんにやくのおでんをそこへどつぷりと漬けて、ふうふう言いながら食べます。

お好み焼きは、うどん粉を水でとき、直径二十五センチくらいの円形にうすく延ばします。その上に、ねぎを細かく刻んだものに乗せ、天かすや竹輪などを乗せ、その上から、うすく又うどん粉をかけます。軽く下が焦げてきたら、全体を裏返します。そして上から金具で押さえつけます。そして充分火が通ったら、ひっくり返し、ソースかしょうゆを刷毛で塗ります。そして青さとかつお節をかけて出来上がりです。お好み焼きというのは、本来こういうもので、今のように、

最初にかき混ぜたり、ねぎの代わりにキャベツを使うのは邪道です。あのねぎの焦げた臭いが、お好み焼きのおいなのです。殆どの駄菓子屋は、廃業してしまいました。新町の「かのう」今は、一八（いっぱち）と言いますが、ビールや酒も出して、子供は寄り付かなくなっています。お好み焼きは、正しい、正統なものをつい最近まで売っていました。「かのう」の店の壁に、「おやつを買うなら、僕も私も「かのう」のおやつにきーめた。」と筆で大きな字で書いてあったのを覚えています。

まつり・行事

浜地区には、大きな祭りや行事は、正月、ほんこ（報恩講？）さん、盆、まつり（蟹まつり）の四つがあり、それぞれ、各町内の提灯台を立てました。昔は町内の人も多かったので、何度も提灯台を立てられたのでしょうか？今では、もう年一回、盆に立てるだけとなっています。

正月は、殆ど今と変わりません。しいて言えば、宮さんの露天商が、昔はもつと沢山出ていてとても賑やかでした。しかし今でも住民の殆どの人は、鳥出神社

に初詣に来ますが、とにかく絶対人口が少なくなっているの、あまり商売にならなくなったのでしょね。

我家は、ブーツと八百屋商売をやっていて、大晦日は、あちこち店の掃除や、片付け、車（当時、くろがねとかオリエントという、オート三輪でした。）の洗車などで、終わると大体1時を回っていました。紅白をゆっくり見たいと何度思ったか知れませんが。そして戸締りをして、外にしめ縄を取り付けて、やっと終わります。終わるまでちゃんと「市やん」が風呂を落とさずに待っていてくれました。うちの隣は、文化湯という風呂屋さんで、うちの店の横が、風呂の裏口というか、風呂焚き場だったのです。市やんは、みつゑさんとかみさんとその風呂の2階に住み込みで働いていました。かみさんは、おんな風呂で、赤ちゃんの面倒などの小間使いをして、自分はそこで風呂焚きをしていました。だから隣同士で、良く話しもし、仲がよかったです。だから、「もうじきしまうで、もうちょっと待って！」と声をかけておくのです。そして、もう殆ど落とす風呂に入り、一年の垢を落として、正月を迎えたのでした。だから、元旦は、いつも昼頃まで寝ていたのです。

ほんこさんは、子供心になんやら祭りなんやなあ・・・と思うくらいでこれといった思い出はありません。組の人が、それぞれの家を回って、正信偈（浄土真宗の基本のお経で、帰命無量寿如来・・で始まる。）を勤めました。仏壇には、三角の内敷を敷いて、飾り立てて、お勤めの時は、ろうそくは赤いのを使います。昔はこうやってみんなの家を回ったのです。仏壇に参るのですから、仏間は、応接の間でもあったのです。ズラッと座布団を敷いて、みんなに座ってもらい勤めてもいます。だから互いに家の中はどうなっていたのか殆ど分かり合っていたものです。いつ頃からかこの風習もなくなっていました。

盆は、もう何と言っても、鯨船です。われわれは、「くんじゃぶね」と言っていました。盆は本来、亡くなった先祖が、帰ってくるとされ、その霊を迎える儀式、行事が主だったと思われませんが、この辺りでは、仏壇をきれいにし、飾り付け、墓参りをするといったことだけになりました。子供にとっては、もうなんと云っても、「くんじゃぶね」が最大の楽しみでした。

ずっと鯨船についてまわり、当時は、われわれの所の「神社丸」が、常に宮さんに入るの一番のりで、

神社丸を持っている、浜地区の北の六町の北島は、宮守も仰せつかっていて、一番格が上でした。そして、宮町も北島に入っていたのです。

子供心に、神社丸の練りが一番激しくて、かつこよくて、凄いんだと、他の地区のは見ていませんから一途に信じていて、学校なんかでよく自慢しあっていた。鯨に銚を打つ踊子は、「はたし」(語源は、刃刺？秦氏?)と言い、子供たちの羨望的でした。もっと小さい子は、「ろーこぎ」(櫓漕ぎ)で、船の両脇の手すりに、花笠をつけ赤い着物を着て、しがみついています。こうやって浜の子は、度胸をつけて育っていきましました。太鼓たたきは、青年の役で、もう凄い大人の人に見えたものでした。なんとと言ってもこの太鼓叩きが一番カッコ良いのです。あとは、鯨の役ですが、もうこれは、血気盛んな若者がわれ先になりたがる役でした。この鯨の役は、毎年、定員オーバーで、今でも困っているほどです。昔の若者は、漁師が多く、当然荒っぽくて、気に入らないと、どこかに逃げていってしまい、突かせないことがあります。年寄りが探し回り、怒鳴りまくって、突かせていたのを覚えていません。鯨船の話は尽きません。

盆が終わるとすぐ、まつりでした。正式には、「がにまつり」というそうで、提灯台が立つので、祭りかなあ・・と思ったくらいのものでした。鯨船は、昔はこのまつりの時に出していたと言ひ伝えられています。しかしこの時期は、漁で忙しいので、盆の時期にあわせて行うようになったと聞いています。どうして「がにまつり」というのか？ガニがこの時期獲れたのか？祭りは「えべっさん」をお祭りしたのだとも聞きます。蛭子町の蛭子の字を使い、東富田公園の西北角に、蛭子神社と書いた小さな石柱があります。今は、鳥出神社に合祀されているのですが、蛭子神社は、漁業の神様で、そういうえば、七福神のえべっさんは、鯛を釣り上げています。だから浜地区の人たちの信仰が篤かったものと思われまます。

以上の正月・ほんこさん・盆・まつりの四つが、いわゆる富田の祭りで、提灯台を立てたのです。昔は、名四国道国道の堤防が無かったときには、この提灯台を海に運び、総出で、タワシで海の水で洗い清めて、白いさらしをぐるぐる巻きに巻いて、鯨船の倉庫にこの町のものど分るように置いておいたものです。

このまつり以外に、最大のものは、一月十四日の「ど

んど」です。十メートル以上はある竹を二十本以上円錐形に立てて、縄で倒れないように周囲にくいを打ち、引つ張って支えます。この竹にわら束を沢山くくりつけて、この中に、正月使ったしめ縄などを置きます。日が沈む六時ごろ、まわりに酒を撒いて、清めてから点火します。旭町を含めて浜地区の十五の町内のどんどが次々に点火して、十五の勢いよく燃え上がった火柱は、夜空を焦がします。当時沖からこのどんどを見たら、水面に炎が反射してさぞ見事な美しい景色だったろうと思います。しばらくすると、竹が倒れて、竹のはげる、「パーン、パーン」という音が、次々として、一段落した頃、みなそれぞれ火の燃えている所へ行き、金網や、五徳など持ち寄り、小ささまさまな鏡餅を焼きます。多少焦げ目をつけるだけで良いのです。どんどで餅を焼いて、家でぜんざいをして食べるのです。

家では、本講汁といって、砂糖の入った味噌汁に、五センチくらいにぶつ切りにした大根や、サトイモ、人参、揚げ、などの具を沢山入れたお汁を作ります。とてもおいしくて、何杯もお代わりしました。これは今でも続いています。

どんどで焼け残った竹の切れ端を屋根の上へ上げて

おくと、火事にならないという言い伝えがあり、みんな競って竹を屋根に上げたものでした。どんどの火に当たると、一年風邪を引かないなどとも言われました。

伊勢湾台風

昭和三十四年九月二十六日、私は高校一年生でした。夕方から、風はどんどん強くなってきました。親父は、早々に、貴重な車（オート三輪）を西の山手の知り合いに預け、台風が来るとの予報に備えていました。備えるといっても特別することなど考え付きません。

しかし夜がふけるにしたがって、風が強くなってきて、ただならぬ気配を感じました。そして、裏の庭に出る勝手の扉を開けた途端、どつと家の中に水が入ってきて、一気にあわてることとなりました。

どんどん水かさが上がってきます。父と座敷の畳を上げ、われわれの勉強机をふたつ並べて、そこへ、畳をどんどん積み上げました。そして上の空いた所へ、これもとても貴重なテレビを載せて、畳が浮き上がらないようにつかい棒代わりにしました。床上まで水が上がりつてきて、膝近くまできていたと思います。ば

あちちゃんは、仏壇から位牌を取り、全員二階に避難しました。どんどん水かさが上がってきました。階段を一段、一段と上がってきます。もう家の中は、一面水がいっぱいあふれている状況です。あと階段は、三段か四段残っているだけとなりました。

子供たちは、小便したいと言い出し、階段からみんなでお便をしたのです。そうしたら、突然、ばあちゃんが、位牌を落としてきた！と叫びました。位牌を持つてくるとき慌てて、中身を落として上がってきたのです。位牌が水の上をぶかぶかと浮いていたのです。そこへみんなでお便したものですから、ばあちゃんは、もったいないもったいないと嘆いていたのを覚えていません。

親父もいよいよ避難を考えだして、大してない貯金通帳を父、自分、弟に分けて布の袋に入れて、身体に縛り付けました。親父は、二階の窓の雨戸を少し開けて、外を見ただけで、もうわれわれには、見せようとはしませんでした。

二階の天井は、ゆっさゆっさと上下に揺れています。家はぎしぎしと風に揺られ、もう生きた心地はしませんでした。そうこうするうちに、水は減りだしました。

しかし風は一向に止みません。親子とばあちゃんを入れて七人家族が固まって台風の過ぎるのをじっと待ちました。

夜中の十二時ごろになると、突然風が止まりました。そつと外を見ると、空一面に星が見え、月明かりが煌々と地面を照らしていました。台風の目に入ったのです。こんな経験は初めてです。ウソのように静かになり、水もほとんど引いています。

しばらくすると、あちこちから、おおい！大丈夫か？と声を掛け合うのが聞こえてきました。町内の人は大丈夫のようでした。

おもては、浜のほうの家の残骸で、道路が山のようになっています。もうもの凄い状況になっています。平屋の家の人は、みんな「つし」（屋根裏のこと）に上がって避難していたのです。もう少し水が上がってきたら、屋根を破って逃げようと思っていたと後で言っていました。

そうこうしているうちに、又風が出てきて、今度は、逆向きの風で、すぐ強い風になりました。しかし今度は、来るときのようにひどくはなく、水も引いてなくなっていましたから、後半は大したことはありません

でした。

翌日、夜が明けてみんな外に出て、びっくりです。家の残骸が、道路上に山になって続いていて、とても歩ける状況ではないのです。とりあえず、家の中の泥を洗い流さないといけません。床上一メートル以上水がきていたので、汲み取り式の便所は、当然全部あふれ出し一面に拡散しています。

幸い井戸水は健在でしたから、どんどん水をくみ上げて、あちこちを洗いました。そうしていると、茂福のばあちゃんの実家や川島の母の実家から、おにぎりを持って駆けつけてきてくれました。もう本当にありがたかったのを覚えています。高校の同じクラスの人たちも沢山見舞いに来てくれました。

我家は、とっさに机の上に積み上げた畳が、数枚を除いて、かなり助かったのです。このあと数日、復旧にかかり、八百屋の店の商品がどんどん腐ってきます。海苔の箱など、石灰が入っていて、凄く熱くなっています。豆が発酵してきて、異臭を発するし、品物はほとんど売り物にならず、次々と捨てました。缶詰は、なかなか普段食べさせてもらえない、パイナップルなど沢山食べました。

町内の死者は、浜のほうの納屋（水産加工業）をやっていた、楠崎さんが二十歳くらいの息子が両親を抱えるようにして、わが家の前から十メートルほど東で、亡くなっているのが材木の間から見つかりました。この妹さんが、友達の家にて助かったのですが、なんでうちだけ皆死んだんや！！と号泣していたのが、まだ目に残っています。

とにかく大変な災害でした。

盆

富田は、盆は特別な意味があります。本来の先祖の供養も大切な行事ですが、富田では、盆には、鯨船が出るのです。十四日〜十六日の三日間も出していました。初日と二日目は、町練りで、北のほうから順に南にまわりました。

当時は、中学を卒業すると、すぐ漁師になる人も多く、近在の工場に勤める人も多く、青年の数が、今とは比較にならないほど多かったのです。子供たちも多く、ほとんどの家庭で、四人兄弟、五人兄弟というのはざらにありました。鯨船を引く子供も、ロープを継

ぎ足して引くほど多く、鯨船の両側につく青年も、びつしりとつかまっついて、練りも非常に軽快でした。

最終日の十六日は、朝一番で、鳥出神社に行きます。

鳥出神社では、境内に入る前に、まず鳥居を突きます。

一旦ヤママスの交差点まで下がり、鳥居の前近くまで鯨を追い詰め、そこで鯨に逆襲されて、「とーもりせ」

(一目散に船がバックして逃げる時の呼称)となり、かなりの勢いでバックして、矢嶋の歯医者を超え、キング堂の交差点まで逃げます。そしてこの交差点で、船をぐるぐると回し、デモンストレーションをします。そして、最後の詰めにかかります。鯨を追い詰め追い詰め、鳥居の前で、ドーンと突きます。

このあと、境内に入り、同じようにして、本殿前の鳥居を突き、一休みしたあと、今度は右側の、「えべっさん」(蛭子神社)を突いて、次の船と交代します。

しかし、今でもそうですが、この神社の境内での練りが、長いのです。見物人がおおぜいいるので、青年たちも、いいとこ見せなければと、頑張るのです。最後の詰めの鯨を追い詰めて、さあ、という時になると、鯨と練りの若者が肉弾相打つせめぎあいになります。鯨は突かせまいとし、練りの若者は、何とか鯨を押し

え込もうとして、争います。鯨は何か囲みを潜り抜けて、逃げます。そうすると船は又、鯨を追っかけなければなりません。砂煙がもうもうと上がり、練りの若者は、汗とほりにまみれて、境内をぐるっと廻って鯨を追いかけます。地面の土は、柔らかいので、鯨は重く感じます。そして又鳥居の前に鯨を追い詰めて、さあ銚を・・と思うと又、鯨が暴れて、逃げるのです。これを四回も五回も繰返して、練りの若者は、もうへとへとになる頃、真剣に怒れてきて、鯨を押しえ込み、やつと銚を打ちたてて、一回目が終わります。次のえべっさんも同じようにして、突いて、やつと宮さんでの演技が終わり、次の船(中島組)と交代するのです。

さて、これで宮さんを終わったあと、しばらく昼過ぎまで休憩します。そして充分体力を回復したあと、浜へ行きます。浜では、伊勢神宮と多度大社を突きます。今は、浜の通りで練るのですが、昔は、本当に砂浜でやりました。砂浜です。船を練るのはいいのですが、鯨とおっかけっこするのは、もう本当に大変でした。砂地ですから、船は凄く重くなります。最も船を引く人数は、今とは比較にならないほど沢山いました

が・・それでもなかなかコントロールがままなりませんでした。このふたつで最後ですから、鯨の逃げようも半端ではありません。宮さんのように鯨を囲い込むような仕切りもないので、逃げ放題です。気に入らないうと工事中の名四国道国道を走って逃げて行ってしまった事もありました。もうこのあたりのせめぎ合いは、喧嘩のように怒号が飛び交い、周りで見ていた私たちは、怖ろしさに震えていました。

このようにして、一年の最大のイベントの鯨船が終わります。この後は、新々町の鯨船の倉庫まで、ゆるゆると、伊勢音頭を唄いながら伊勢音頭の「ほんまかやーとーこーせー・・」の囃子の部分だけ鯨船を動かして、名残惜しげに時間をかけて帰って行きます。これで盆がいつてしまう・・となんと物悲しく、伊勢音頭が聞こえたものでした。

盆といえ、この三日間、毎晩あちこちで盆踊りが開催されていました。遠く、一色の広小路や、浜元町の観音さんの所が賑わっていて、鯨船のあと、夕食を食べて、浴衣に着替えて、友達を誘って繰り出しました。何とか女の子と仲良く一緒に踊りたいなど、思っても、なかなか勇気が無く、友達にお前駆け、お前行

けと譲りあって、他のグループで、仲良く一緒に踊っているのを見ると、なんともうらやましくて、悶々として眺めていたのです。

銭湯

私の家のとなりは、文化湯という風呂屋さんでした。大体三時ごろから開業します。中学校の三年くらいになると、当時は、まだあまり進学するものは多くなかったのですが、どういう訳か勉強する境地になって、どんどん成績も上がり、それが励みになり又勉強すると言う、大変優等生になっていきました。そして、いつも風呂は、十二時前の落とし風呂の常連になりました。そしてこの常連の仲間が自然と出来て、勝やシゲちゃんやしょうちゃんたちといつも一緒でした。ここで、色々勉強の情報の交換や、面白い話や、冗談を言い合って、受験勉強のプレッシャーから少しだけ息抜きが出来たのです。

文化湯は、入口右側の男湯と書いたのれんを掻き分けて、ガラガラとガラス戸を開けてはいるとすぐ左に一段高い番台があり、風呂屋の姉さんが座っています。

た。高いといっても百五十センチも無かったと思います。首を伸ばすと女風呂の脱衣場が殆ど見渡せました。ここで十円払います。そして目の前には、衝立があり、大人の首ほどの高さで、ちよつと首を伸ばすと、男風呂の中まで見渡せました。左をチラッと見ると斜めに少し女風呂も見え、慌ててなんでもなかったように、右へ行き直接脱衣間になりました。下駄箱があるのですが、履物はいつも脱ぎっぱなしで入りました。右手の壁面に脱衣の鍵付きの番号の書いた扉の棚が並んでいました。しかし殆ど、その前の床に散らばっている脱衣かごに、着ているものを脱ぎ捨てて、大きなガラス戸を開けて湯船のある風呂場に入りました。

昔は、高い天井から吊るした裸電球のみで、薄暗い風呂場でした。真ん中に楕円形の大きな湯船があり、右の奥に、大人が二人入るといっぱいになる程の小さな湯船がありました。この小さな湯船で、子供の頃、三歳ほど年上の人に、両手を手ぬぐいで縛って、腕の間に両足を入れられるかとおだてて、その人が、そんなの簡単・・とやり始めたところ、バランスを崩して、湯船に落ち込み、アップアップとおぼれかけて、慌ててみんなで助けあげた記憶があります。

女湯との境界の左の壁面には、湯を蓄えるタンクでしようか、高さが、一、五メートル、奥行六十センチ、長さ三メートルくらいの出っ張りがありました。

みんな中央の大きな湯船のまわりに陣取り、湯船から桶で湯を汲み、身体を洗うのです。この湯ですが、私たちは、いつも落とし風呂でしたから、今のように、浄化装置なんて言うものは無かったので、外が暗くなる頃には、湯もそれなりに汚れます。恐らく新町から中川町まで、四町内の人が殆どこの風呂を使っていたから、一町内、当時は50世帯はありましたから、四町で千人、男女半々としても、五百人から利用していたわけです。だから、夜暗くなってから、風呂に入ると湯垢の臭いが、ぷんとして、当時は、これが風呂の臭いでしたからさほど汚いとも思いませんでした。裸電球の下で、湯面から十センチも手を下げるともう手が見えないほどの湯垢でいっぱいの湯船でした。薄暗い裸電球で、夜中の十二時前に数人の受験仲間と、語り合いながらの風呂は、本当にホッとしたのを覚えていきます。

文化湯と言えば、風呂焚きの「市やん」と風呂の客

との怒鳴りあいを出します。風呂ですから、熱かったり、ぬるかったりする訳で、熱ければ、水をさせば適温になりますが、ぬるいのは、熱い湯を送ってもらわないとなんともならない訳です。そこで、「ぬるいぞー」と風呂焚きの市やんが出入りする小さなくぐりドアがあるのですが、そのドアに向かって叫ぶのです。しかし、市やんは、機嫌がいいとすぐやってくれますが、機嫌が悪いとなかなか言うことを聞いてくれません。そのうち客のほうも頭にきて、そのドアをどんどんと激しく叩きます。そうすると今度は、市やんが、怒って「やかまつしやれい！ちゃんと言えとるわれい！」と怒鳴り返します。

この文化湯は、今の東富田公園のところに、政八と材常という材木の加工所が並んでいて、そこから出るおが屑を市やんがリヤカーで運んできて、それを釜で燃やして風呂を沸かしていました。一人で黙々と風呂焚き作業をしていると、時には機嫌の悪い時もあるわけです。片目が悪く、片足はビッコを引き、中日の大ファンで、隣の私たちにとって、笑うととても優しい顔になる人でした。

この頃は、どのうちでも、風呂のあるうちはあり

ませんでした。みんな風呂屋に通っていたのでした。今から考えてみると、私たち住民に、この風呂屋の与えた影響は、非常に大きいものがあると思います。ここでみんな、コミュニケーションを図っていたのです。文字通りのはだかの付き合いでした。どこにどう人間が住んでいるのかは、風呂屋で、なじみになって自然と親しい関係が出来上がりました。

中学生くらいになると、みんな毛が生えてきて、恥ずかしげに必死になって前を手ぬぐいで隠して風呂に入ってきましたから、よく年寄りが、「おお、チンポに毛が生えてきたか？いっぺんみしてみよ！」と隠している手ぬぐいを奪おうとされて、必死に逃げ回っていました。特に、ボートラの爺は、声も大きくて、強引で、しつこいので嫌がられていました。漁師町ですから、する事が乱暴なのです。みんなこのようにして大きくなったのでした。

製材所

政八（伊藤政八）と材常（伊藤常左衛門）の製材所の話が出たついでに、製材所の話をします。

製材所の裏は、運河になっていました。今は、流れは、暗渠にして上をせせらぎ公園としてみんなの憩いの場所となっていますが、この運河は、江戸時代より前からずっとこの富田のいろいろな物資を運ぶ運河として重要な役割を果たしていたのです。

この川は、近鉄富田駅から、今は暗渠になり、中央通りを富田で最古の長興寺のとなり生川電気まで来て、うなぎや善兵衛の横で表に出て、ここを曲り、正泉寺の前に至り、このあたりで、富田の豪商の「さかきち(酒吉)」の酒を船で運んだと言います。そして、真つすぐ東に向かい、今の一号線のあたり、願入寺の裏から、北に左折し、この政八や材常の材木を積みおろしたところを通過して、塩役橋・平次郎橋を通過して、富洲原の港へとつながっていました。

今の新町一区の突き当たりには、材常の入り口がありました。もうこの材常のあった痕跡は、全く無くなっただけでしたが、今の東富田公園のあたりはずっと、のこぎり屋根の製材工場が並び、キーンという、材木を切り刻む音が絶えませんでした。

この公園の東側半分は、材木が山積みされていて、それでも足らず、蛭子町の西の角(今の栗田保険屋さ

ん宅)にも沢山の材木を積み上げてありました。ここでよく遊んだのです。今なら、絶対危険地帯として立入禁止となるのは間違いありません。

さて、天神町の突き当たりにも政八の本家は、すっかりと残っており、加工した材木も残っています。この本家の裏手には、工場の建物の一部がまだ現存しており、裏手から見ると材木を加工した帯のこぎりがいくつか、とぐろを巻いてしまつてあるのが見えます。このまま朽ち果てさせてしまうのは、なにやら勿体ない気がします。何とかしないとイケません。

かごやの廣さんのこと

うちの前、狭い横まちを挟んでとなりは、かごやの廣さんのうちでした。廣さんは、かごを作るのを主な仕事にして、連子格子に取り付ける目隠しの簾なども作っていました。町側に崩れていかなないように竹でつかい棒を何本も立てて、十メートルほどもある太い竹を何十本も材料として備蓄していました。かごの注文があると、適当な竹を抜き出し、直径十五センチくらいのを四つ、あるいは六つに仕切ったものに、取

っ手を付けた金具で、コンコンと竹に金具で割れ目をつけ、そして一気に両手で、竹に沿ってその金具を押し込んで、パカン、パカンと竹の割れる音とともに、四つ、あるいは六つに割れてばらされます。そしてそれらの節の部分を削ってならし、更に細かく竹を一〜二センチほどの中に割っていきます。そして更にその竹を薄く皮を剥ぐようにばらしていきます、段々とかこの材料の形になっていきます。適量が揃うと、それらの竹を格子状に編み上げていき、底の部分が出来る、今度は折り曲げてかごの側面の形に編み上げていくのです。蓋の無い箱状の形になると、今度は、太い竹を三つに割ったくらいの大きい竹にして、節を削り、ひちりんの火に炙り、竹を曲げます。四ヶ所曲げて、枠のように加工したものを、ふたつ作り、かごの形をしっかりと整えるように挟むように取り付け、針金でポイント部分を締め付けて固定します。かごを持ち易いように持ち手の部分も作ります。見てみると、いとも簡単にかごが出来ていくのですが、廣さんの職人芸は大したもの、どんな竹も、みるみる加工されて、いろいろな形になっていくのは見ていてとても楽しいもの、でした。廣さんは、仕事に熱中すると、しーっ、しー

つとよだれをすすむようにするのが、くせでした。私の父親は、八百屋をしていて、大きな荷台の自転車にこのかごを載せ、その上に交差するように二つかごを載せて、市場で仕入れた青果物を積んで何度も往復して運んでいました。小さい頃は、このかごに弟と二人座布団を引いて座らされて、市場などに連れて行ってもらったのを覚えています。

当時の市場での青果物は、殆どがばら売りで、ひと塊単位でセリ商いをしていたのです。木で出来た箱に入っていたものといえば、りんご箱とみかんの箱が、代表的でした。浅い簡単な木枠のような箱に、桃とか柿とか梨は、並べられていました。それ以外の地元で取れる野菜類などは、適量ずつ固められて地べたに置かれていて、競り落とした野菜は、このかごに入れて運ぶのです。八百屋かごと呼ばれて、これらのかごは、八百屋の必需品でした。

市場に手伝いに行くのは、やはり学校がありませんから、夏休みなどが多かったのです。夏はなんと言ってもスイカが最大の主役でした。広い市場のスペースを地べたに五個×十個くらい、大きさ順にきれいに並べたものを一単位としてこれが何箇所にも並べられてい

て、順に競っていました。競る前には、適当なスイカを選び、持ち上げてドスンと落として割り、近くの何人かが争うようにして手で西瓜の果肉をつかんで試食していました。良く真ん中の部分の種の無い所を「食べよ」と貰ったりしました。中学生くらいの頃になると、どこの八百屋も自転車卒業して、オート三輪で運んでいたと思います。市場が終わって、昼過ぎにこの競り落としたスイカを取りに行くのです。車を西瓜のすぐ傍まで寄せて、私が、荷台の上の父に向かって、スイカを投げて渡すのです。ほいっ！ほいっ！・・・とリズムを取って手際よく投げるのです。何十個と投げると結構腕が疲れました。しかしお陰で、私の腕は、筋肉が発達して、どういう訳か左手だけは、誰と腕相撲をしてもまず負けませんでした。負けたのは、大学の同じクラスだった渡辺君（東京オリンピックでレスリングの選手でした。）と会社に入ってから、商品管理部の間瀬さんだけでした。この二人は、腕の太さが、太もものようでした。もう手を握り合った瞬間に、「あっ、これは負けた！」と分かるのです。